

成果報告書

記入日 2016年 8月 29日

氏名 押尾 高志	渡航先国名 モロッコ（テトゥアン）	所属機関 アブデル・マレク・エッサーディー大学
研究テーマ：16世紀イベリア半島および西地中海地域におけるモリスコ		
研究期間：2014年 6月～2016年 7月		
研究成果（概要） 史料調査のなかで、モロッコ北部とイベリア半島との歴史的な関係の深さを示す多くの史料を入手したほか、現地の研究者を通して、モロッコにおけるモリスコ関連の研究動向を把握することができた。今回獲得した情報・人脈は今後の研究に大変有意義であると考えられる。		
研究成果（詳細） 本研究の目的は、モリスコについてイベリア半島・マグリブ（北アフリカ）の両岸から多角的に考察を行うことで、スペイン史という枠組みに留まらないモリスコ研究の再検討を図ることにあつた。また、スペイン語史料とアラビア語史料の双方を分析することで、モリスコの集団意識や彼らの地中海的ネットワークを明らかにすることを試みた。 私が滞在したモロッコ北部の都市テトゥアンは、上記の目的を達成するのに大変適した都市である。それは、この都市がアンダルス（イスラーム支配下のイベリア半島）からの移民によって15世紀末に再建された都市であり、現在に至るまで多くの住民が自らをアンダルスィー、すなわちアンダルス出身者の末裔を自認しているからである。また、この都市から約30km北にはスペイン領アフリカの都市であるセウタが位置している。現在テトゥアン市民はビザなしでセウタに入国できるため、セウタとテトゥアンの住民の間では日常的な交流が大変盛んである。さらに、近年モロッコとセウタの国境は、西アフリカ諸国やシリアからの移民がヨーロッパへの入国を目指して集まり、ヨーロッパの玄関口という性格を強くしている。以上のことから、現在に至るまでジブラルタル海峡を挟んでスペインとモロッコ北部は、非常に密接な関係を保っていると言えよう。 現地でのモリスコ関連史料調査は、まずテトゥアン総合図書館から着手した。テトゥアン総合図書館には2000点を超える写本史料が保管されているが、同図書館では現地の研究者によってアンダルス関連写本のリストが作成されているため、写本のカタログとそのリストを参照しながら史料調査を行った。その結果、歴史書『ナスル朝年代記抄本（以下年代記抄本）』やアンダルス出身者によるアラビア語文法に関する著作、礼拝儀礼に関係した史料などを入手した。『年代記抄本』は1492年のグラナダ陥落以降に発生したアンダルス系ムスリムたちのマグリブへの移住を取り扱った史料である。これ以外の著作はイスラーム圏全体に共通する著作であるだけでなく、16世紀を通してスペインではモリスコの間でアルハミーア（アラビア文字でスペイン語を表記したもの）の形をとって再生産・流通していた。これらの		

史料を精査することで、アンダルス出身者のイスラーム知識の伝達について新たな視点が獲得されることを期待している。続くダーウッド図書館では、史料調査に加えて研究文献の収集を行った。これは総合図書館の写本を除く書籍管理がずさんであり、目的の研究文献や書籍を調査することが難しかったためである。特に研究の進展にとって重要と思われるのは、スペイン保護領時代のモロッコ人およびスペイン人研究者によるアンダルス関連・モリスコ関連史料の校訂本を入手したことである。加えて、アンダルス文学の研究文献についても調査を行った。これは、前述したアルハミーアがモロッコでは文学に分類されているという予想に基づいていた。アラビア語の研究文献でアルハミーアを扱うものは多くはないのだが、1941年発行の文学研究書のなかで、アルハミーアについての項目が存在する事を確認できたのは大きな収穫であった。

テトゥアンではその他にトーレス図書館でも史資料調査を行ったが、ここでは一次史料の収穫はなかった。しかし、総合図書館で入手した『年代記抄本』についての研究文献を入手できたことの意義は大きい。この研究文献では新しく発見された『年代記抄本』の写本と総合図書館所蔵の写本との間での比較研究を行っており、イベリア半島とマグリブ間の住民移動をアンダルスからの移住者たちがどのように認識していたのかを写本の端書きを含めて分析している大変貴重な資料である。

これらに加えて、ラバトの国立図書館では17世紀にモリスコによって書かれた、自伝的な性格を持つ写本を入手した。この写本はチュニジア国立図書館にも保存されており、チュニジアの研究者によって一部校訂が行われているが、ラバト版については校訂が行われていない。この史料の分析は、特にモリスコたちの自己認識の一端を捉えるという目的達成のためには、大変重要であると考えられる。

次に現地における研究動向についてであるが、モロッコにおけるモリスコ研究は必然的にアンダルス史研究に内包されるものであり、その研究傾向としてはアンダルスからの移住者が多かった諸都市（サレやテトゥアン、アラーイシュ、シェフシャウエンなど）におけるアンダルス系ムスリムの流入とその後、という形で取り扱っている研究が多い。例えば、ラバトのサレ地区におけるアンダルス系家族の生業であった海賊業や、テトゥアンを再建したアンダルス系ムスリムによる対スペイン・ポルトガルとの外交、在地権力との間の政治的対立などがあげられる。特にモロッコ北部諸都市とセウタやジブラルタルの密接な政治・経済的交流の存在は、本研究の目的の一つであった地中海的ネットワーク解明の一つの突破口になると考えられる。

また、モリスコという単語の使用について、現地研究者のなかにはこの呼称ではなくアンダルスィーを用いるという立場をとる人物が多く見られた。これはモリスコをあくまで「アンダルス出身のムスリム」とみなし、モリスコという言葉がモーロという現在はムスリムに対して差別的に用いられる単語のさらに縮小辞であることから使用を避けるべきであるという立場である。このような立場は、2012・2013年に調査を行ったスペインの研究者とは若干異なる。スペインの研究者の間では、キリスト教支配下のムスリムを表すムデーハルとキリスト教への改宗ムスリムであるモリスコを区別することはあっても、学術的言論空間でモリスコを「アンダルス人」と呼ぶことはあまり一般的ではない。無論スペインにおけるこの語の使用はあくまで学術的な使用に限ったものである。私自身、モリスコたちの多くがイスラーム信仰を捨てず、彼ら自身の宗教実践を維持し続ける試みを行っていたという点には異論はない。しかし、モリスコのおかれた歴史的環境とその特徴を軽視し、他のアンダルス系ムスリムと同列に扱うことには疑問が残る。また、アンダルスィーとモリスコを異なる文脈から区別する研究者も多い。これは

アンダルスィーはあくまでアンダルス出身者のみで形成された集団を指し、モリスコはスペイン人と混合婚を行っている集団を指すという解釈である。加えて、17世紀以降のイベリア半島からの移住した者についてはモリスコと呼び表す解釈も存在する。こちらは明確にムスリムと改宗ムスリムとを区別するという意味合いが強い。このようにモリスコという言葉は複数の意味を想定して用いられているため、その定義を明らかにしつつ、論じる必要があると考えられる。

最後に本留学の目的の一つであった研究会・国際会議への参加についてである。留学中には、多くのモロッコ人研究者や外国人研究者と新たに知り合う機会を得た。共通の友人を介して知り合う場合もあったし、私自身が通学していた語学学校に彼らがアラビア語を学びに来て知り合うということも多かった。この語学学校は私の指導教員であるムハンマド・ベナブード教授の子息が経営していることもあり、単なる語学学校の枠を越えて様々な文化事業にも参画している。そして、これらの現地研究者や外国人研究者の紹介・招待を通して、テトゥアンやタンジェで開催された多くの講演会や会議、シンポジウムに参加することができた。日本国内での研究会やシンポジウムの多くは、「国際」と銘打たれていない限り、日本語のみで発表が行われていることが多いが、モロッコではアラビア語・フランス語・スペイン語の三言語（時には英語でも）で報告が行われる。特に、私が研究領域としているアンダルス史・モリスコ史に関するものについては、モロッコ人と外国人の発表者が参加し、発表・質疑応答とも複数言語で行なわれることが常であった。このような多言語環境は、スペイン・フランス両国の保護領であったというモロッコの歴史的経験と、ヨーロッパの対岸に位置するという地理的特質に起因するものである。それ故、この環境自体を無批判に肯定することは避けるべきだが、複数言語の使用によって問題を多様な視点を交えて共有し、相互に情報の共有を行うことや議論の理解を深めることが可能となることは確かである。

私自身も、2016年4月28日に教員養成高等学校（マルティル）で行われた研究会『アンダルス人たちの教育とコミュニケーション 新しい展望』において「モリスコ期におけるイスラーム的・アンダルス的知識の伝達」と題した発表を行ったが、発表それ自体はアラビア語で、そして質疑応答の際にはアラビア語・スペイン語の両言語を用いた。発表の内容は、モリスコたちの間でアンダルスからの伝統やイスラーム的知識が、文字や絵画を通じてどのような形で伝達されていたのかを取り扱ったものであり、聴者からも多くの質問が寄せられた。特に同じく発表者であったムスタファ・アディラ教授からは、私のモリスコ史認識について肯定的なコメントをいただいた。すなわち1492年のグラナダ陥落はアンダルス史の終点ではなく転換点であり、モリスコはスペイン史のみならずアンダルス史ひいてはイスラーム史にも位置付けられるという認識である。この発表の一部をまとめて、スペイン史学会の『スペイン史研究』に論文を投稿した（現在査読結果待ち）。

今後の研究方針としては、モリスコの集団意識の一つであるアラビア語の使用状況とその教育の実態把握、およびモリスコの著作（アラビア語・スペイン語）から見る他者認識を明らかにする。ここで言う「他者」とはキリスト教徒のみならず、マグリブ社会のムスリムも含まれる。これに加えて、モリスコのイスラーム認識とその実践を明らかにすることで、ジブラルタル海峡をまたぐ彼らの集団意識の全体像を描き出すことを試みる。具体的には、今回の調査によって入手したアラビア語史料と既に入手しているアルハミーア史料との比較分析を中心に行い、その研究成果を博士論文として提出する。

留学中の生活・研究でのトピックス

二年間の留学生生活を終えて、最も心に残ったのは日本語教師としての経験である。これは現地テトゥアンのレルチュンディ文化センターCentro Cultural Lerchundi の代表者からの依頼で始めたボランティア活動であった。この文化センターはフランシスコ修道会系の文化団体で、モロッコ北部にはテトゥアンとマルティルに拠点が存在し、現地住民と協力して文化教育活動（外国語教育や映画の上映、講演会など）を行っている。ここで私は2015年夏から2016年春にかけて計8ヶ月間、一回90分の授業を週二回担当した。生徒数は最大で13人、出身地はモロッコとスペインであった。生徒の年齢は10代から40代までと幅広く、日本語学習は初めてという生徒が大部分を占めていたため、媒介言語としてアラビア語・スペイン語・英語の三ヶ国語で授業を行っていた。生徒たちの日本語学習の動機は、日本のアニメや漫画への興味という理由が一番多く、次が科学技術（自動車や電気製品）や文化（特に合気道などの武道）、美術（建築物や服飾）、最後に非ヨーロッパ言語への好奇心であった。彼らの学習動機は、日本への留学や就労という実用的なものではなく、むしろ知的好奇心や趣味というところにあった。

にもかかわらず、生徒たちの学習意欲は大変高く授業には積極的に参加し、授業後も文法や単語の使用についての質問を私に尋ねてきた。私も彼らの熱意に応えるべく、日々自らの日本語理解を外国語で深めていった。私の生徒たちは、実際のところ私の日本語授業の生徒ではなく、私のアラビア語・スペイン語の先生たちであったのかもしれない。また、彼らとは授業外でも親交があり、彼らは私の誕生日を祝ってくれたし、私の送別会の際には自宅に彼らを招き、日本料理を振舞って彼らとの別れを惜しんだ。日本語教育が専門ではない私にとって、外国語での日本語教育は当初の予想よりもかなり困難な仕事ではあったが、モロッコのような多言語空間でしか得られない貴重な経験であった。なお幸運にも、この日本語コースは私の帰国後もJICAのテトゥアン駐在隊員によって引き継がれることになっている。



テトゥアン市街

今後の社会貢献

「言語は鍵である」とはアラビア語で用いられる表現のひとつである。世界言語としての英語は、現在のグローバル化する社会において、社会における表のドアを開けるための重要な鍵として機能している。しかし、英語以外の言語の重要性もまた増していることも確かである。日本語教師として働いた経験は、私にそのことを如実に示してくれた。なぜなら、日本語はモロッコ人にとって決して実用的な言語ではない

にもかかわらず、生徒たちは日本という他者を理解するために、英語ではなく日本語という我々の裏のドアを開けるための鍵を得ようと試みたからである。お互いの差異を尊重する社会において、相互理解はもっとも基礎的な要素である。残念ながら日本でアラビア語を学ぼうとする人はまだまだ少ない。しかし、二つの鍵を持つ者としてモロッコでアラビア語を学び日本語を教えた経験を生かし、研究や教育を通して、双方の社会の架け橋として社会貢献を果たしていきたいと考えている。



日本語コース 修了式